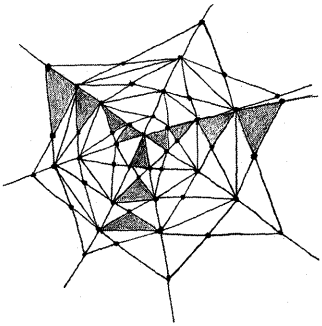
子どもたちへのまなざし (6)

マフラー作り (一)

松井　とし



ある年の木枯しが吹き始める頃、初めて四歳児の子どもたちとハンドニッティングをしてみた。新教育要領のもと、今では環境構成のあり方は難しい課題であろうが、当時の私は「楽しいことをたくさん見つけようね」といった気持ちで、いろいろな活動をさりげなく始め、興味を持った子どもたちと一緒に日々の生活を楽しんでいた。ハンドニッティングとはいっても、開いた五本の指に毛糸を交互に絡めていくと、手のひらの側にゴム編みがどんどん長くつながっていくというものであった。女児の中にはとても楽しんで降園までに仕上げてしまった子や、家に帰ってから一人で作り上げたという子どももいたが、個人差の大きな四歳児、特に男児には難しかったのかも知れない。せっかくやり始めても、中断したまま次の日に続きをしようとすると、毛糸がほどけてしまい、あとかたもなく

なってしまっていたこともあった。

しかしいつも、明るく、くったくがなく、じっとしていられないS男は、ふだんのようすからは想像できない一面を見せてくれた。時々窓の外のサッカー仲間のようすを気にかけながらも、静かな部屋の片隅で傍らの女児と楽しそうに言葉を交わしながら、一心に小さな手を動かしていた。何日もかけて自分で工夫し、途中で毛糸を変え首のところで結んだ時に、左右の色が違う独創的なデザインのマフラーが出来上がった時の、彼のうれしそうな表情がほほえましく思い出される。友だちから驚かれたり、誉められたりしながら、ひとりでニコニコと笑みがこぼれてしまうような彼を見ていて、私もとてもうれしく思い、感動した。S男はこのマフラー作りを通して、物事にじっくりと取り組み、創造する喜びを経験し、彼自身新たな自分に出会ったのではなかったかと思われた。

ちょうどその頃クラス懇談会があり、母親たちも大いに興味を示したので、作り方を説明した。その折に、今回この活動に興味を示さずサッカーに興じていても、別の機会に必ず同じような活動に出会うことになると思うので、子どもたちの形に残らない、主体的な生活を認めて温かく見守って欲しいと話した。ところが次の朝、ある男児が「お母さんがね、僕もマフラー作ったら時計買ってあげるって」とポツンと言いに来た。

（つづく）